



ナイチンゲール伝 図説 看護覚え書とともに

著：茨木保
A5版・208ページ
定価：1,944円(本体1,800円+税8%)
発行：医学書院(TEL 03-3817-5600)

ナイチンゲールだけに許された自分にも人にも厳しい人生

評者◎宮子あずさ 看護師、著述業

子どもの頃から私は、「白衣の天使と言われているけど、実際のナイチンゲールは権力べったりの嫌な女だった」と信じてきました。

はてさて、いったい誰がそんな話を吹き込んだものか。母が市民運動をしていた関係で、私は、反権力な大人に取り囲まれて育ってきました。この話も、多分その中の誰かが吹き込んだのだと思われます。

そんな先入観を持ちながら読んだ『ナイチンゲール伝』は、そんな私の確信を一面では深めると同時に、権力志向だけではなく魅力も感じさせてくれました。

著者の茨木保氏は、医師にして漫画家。この評伝も、漫画で書かれています。茨木氏はナイチンゲールを、看護を確立し、病院を変えた変革者として描きます。

膨大な仕事を成し遂げた彼女は、多くの人を犠牲にし、自らを病に閉じ込めてエネルギーを爆発させる、心の闇の深い女性でもありました。目標のために、権力者とも進んで手を組んだ。「ナイチンゲールは権力べったりの嫌な女だった」という見方が生まれるのも、あり得ることと思います。

ただ、この本に出てくるナイチンゲールは、信念、情熱、強迫性など、内的な衝動に突き動かされて、仕事を成し遂げた人に見えます。その意味では、権力者と組むというのは、彼女にとっては手段に過ぎず、権力志向が強かったとばかりは言えません。また、彼女の犠牲になって、過労から命を落とした人までいたようですが、その人たちは恐らく、進んで我が身を捧げたのでしょう。

才能に恵まれ、人を動かす才覚を持つ、ボーダーラインチックな女性。彼女は、晩年は寝たきりになりながら、人を操作し、最後まで強迫的に仕事を続けたのでした。

「彼女は天使……彼女は悪魔……彼女は天才……彼女は嘘つき……」と、著者はナイチンゲールの多面性を描いています。私がそれに続けて言うなら、「彼女は強迫症……彼女は境界型人格障害……」。そんな風にも読めます。どこまで彼女が自分の精神病理に気づいていたかはわかりません。けれども結果として、彼女はそれを手なずけ、膨大な仕事の成果を生み出しました。

著者の愛情も感じられ、私はこの本に描かれたナイチンゲールには、とても魅力を感じます。彼女はとても生きづらく、なすべき仕事に没頭することのみが、生きるすべだったように見えます。

彼女は「ナイチンゲールだから許されること」をたくさんやって、その生を終えます。常に孤独であつたでしょうが、一面では、実にうらやましい人生と言えるでしょう。

正直言って、上司としては勘弁です、彼女。もう、殺されてしまう。でも、実害がなければ、とてつもなく魅力的な女性なのは間違いなし。遠い昔のレジェンドとして感謝しつつ振り返るには、これほどすばらしい人はいません。

ナイチンゲールと『看護覚え書』は、看護師なら学んでおきたい歴史の重要事項であり続けるでしょう。この本はそのための出発点として、まさにふさわしい本。是非多くの方に読んでいただきたいと思います。